

介護職員自己評価表

平成30年4月16日

事業所名	介護老人福祉施設 喜入の里		正社員	非常勤社員
		介護支援専門員	3人	
		社会福祉士	2人	
		あん摩マッサージ指圧師	1人	
		看護師	3人	2人
		介護福祉士	11人	1人
		実務者・初任者研修	7人	2人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備 考
前回の課題に関する改善	18. 8%	40. 3%	13. 0%	27. 9%	

前回の改善計画	
身体的ケアと認知症ケアのどちらも高いスキルが求められることから質の高い教育と訓練を図ってきた。近年、新卒者中心の採用をおこなっていることから、高校・専門学校・大学といった異なる背景をもったスタッフに、それぞれに適したプログラムを個別に取り組むことが必須になっている。一方、近年 病院からの連携の増加にあわせて中重度の認知症を患った対象者が増え、対応できる認知症ケアのスキルアップが急務となっていた。このことから、OJTだけでなく外部講師による現場指導も毎週2回程度おこなっているが改善にバラツキがみられる。他事業所で「コグニサイズ」と「ミッケルアート回想法」の導入により認知症ケアに一定の効果がみられたことから、これらの導入とミッケルアート認定研修により、認知症予防及び認知症の進行抑制に繋げることを計画している。	
前回の改善計画に対する取組み結果	
職員間で認知症ケアに個人差をなくすべく、担当する業務分担を図りラポールを図りやすくした。社会生活に適応でき難い対象者は、できること、興味を示すことをみつけ、少しの時間でも参加して頂けるように働きかけ、「ミッケルアート回想法」やレクリエーション等への参加により小さな参加実績の積み上げをおこなった。また、支援を担当するスタッフからは、日々の状況と変化の報連相を細かく受け、そのことを事例検討会において検討した。これらから、それぞれのスタッフに適した指導に近づきつつある。今後ミッケルアート認定研修受講を希望者に勧めることで認知症予防及び認知症の進行抑制を図っていきたい。	

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合 計
SECTION 1	対象者の接し方や態度について	14. 3%	42. 9%	21. 4%	21. 4%	100%
SECTION 2	仕事上の態度について	28. 6%	28. 6%	21. 4%	21. 4%	100%
SECTION 3	食事について	21. 4%	28. 6%	28. 6%	21. 4%	100%
SECTION 4	移乗や移動について	21. 4%	42. 9%	14. 3%	21. 4%	100%
SECTION 5	排泄について	14. 3%	50. 0%	7. 1%	28. 6%	100%
SECTION 6	入浴について	21. 4%	42. 9%	0. 0%	35. 7%	100%
SECTION 7	着替えや整容について	21. 4%	35. 7%	14. 3%	28. 6%	100%
SECTION 8	服薬について	14. 3%	42. 9%	7. 1%	35. 7%	100%
SECTION 9	意思疎通について	14. 3%	50. 0%	14. 3%	21. 4%	100%
SECTION 10	行動障害について	14. 3%	35. 7%	14. 3%	35. 7%	100%
SECTION 11	普通の生活やアクティビティについて	21. 4%	42. 9%	0. 0%	35. 7%	100%

自己評価及び改善が必要な事項	
スタッフ間で、認知症ケアに対する捉え方、考え方に違いがみられ、支援自体が難しいという声もあったが、考え方、捉え方に対する協議を再三おこなった。協議により、対象者や業務内容によって担当を定め、業務により支援者が変わるしくみをとった。結果、対象者の変化が解るようになり、気づきが増えたなど、評価する声が多かった。これにより、対象者にあわせたケアの提供に関しても改善に向かっている。また、スタッフのスキルアップに向けた指導や訓練も概ね実施できたことから、「体操などの軽運動」「ミッケルアート回想法」にくわえて「コグニサイズ」など、効果が検証された専門的な支援についても導入を検討している。特に、午後の体操は自発的に参加する対象者もみられるなど、スムーズな実施に繋がっていることから、拒否を示す対象者に対しても短時間参加を勧めていく。「眠りスキャン」が導入されていることから、日常の生活リズムに影響をうける睡眠状態を把握し支援の検証をおこなうよう改善する。	
主任 水枝谷 芳文	

外部評価者	障害・疾患・認知症などにより身体を動かさないでいるとその期間に応じて老化が進行します。一方、身体を適切に動かすことを日常的におこなっていると認知症予防や進行抑制につながります。なかでも、低負荷の体操などを日常的におこなう習慣は、自立性の改善や介護予防だけでなく睡眠改善においても期待できます。その意味でもコグニサイズなどの身体を動かす取り組みは評価できます。これからも続けてください。自己評価で課題とされていた適切な認知症ケアは、生活歴・病歴・障害などにより大きく異なります。導入している「ミッケルアート回想法」は日本認知症予防学会で取り上げられたこともある心理療法です。「ミッケルアート認定研修受講」「外部講師による現場指導」などで職員のスキルアップを検討しているようですので、職員のモチベーションアップにつながる取り組みにつなげてください。認知症ケアは、職員間で適切な支援について検討し合うことで職員間の連携が深まります。そのことが共有意識を形づくっていきます。表情や反応の癖に合わせた適切な支援を心がけてください。自己評価から対象者との関係性の深さが伺えますが、二次三次評価に比べ自己評価が低い職員がみられます。なかでも経験の短い職員にその傾向がみられることからスーパービジョンを検討してください。総合的な評価は、専門的な支援が数多く提供されていることが推察できました。これからも地域に根ざした事業所として頑張ってください。
	〒891-0141 鹿児島市谷山中央6丁目51-1 294 特定非営利法人かごしま福祉開発研究所 社会福祉学博士 岩崎 房子